AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会 会報 第54号

空中回廊

コレクション展紹介：「藤井達吉と家庭手芸」
会員のひろば：『国際芸術祭「あいち2022」の美術館さんぽ』の企画・運営
収蔵庫から：木村定三コレクション《刺繍種子胎蔵界曼荼羅図》
美術館から

《刺繍種子胎蔵界曼荼羅図》（部分）
室町時代（14-15 世紀）絹本淡彩、刺繍　木村定三コレクション

愛知県美術館　2023年度 第1期コレクション展

藤井さんちの手作りで趣味良い暮らし
藤井達吉と家庭手芸

2023年3月21日～5月31日

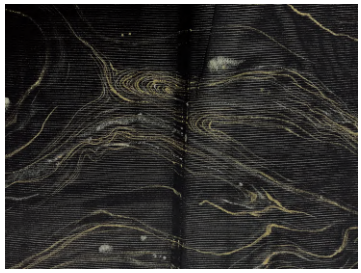


図2

藤井達吉（1881-1964）は、明治末から大正、昭和にかけて活動した工芸家です。七宝に始まり、金工、刺繍、陶芸、木工、図案（グラフィック・デザイン）、油画、日本画、詩歌とあらゆる表現を試みました。

工芸の世界では、一人の職人は長い年月をかけて一つの技を磨くことが自然とされていました。また、工程ごとにその技術に長けた職人が携わる分業システムが採られてきました。そんな中で、藤井はジャンルの垣根を越え、一作品を最初から最後まで一貫して作ることに取り組みます。一つの領域に閉じこもらず、多様な技法、素材に意識を向け、個々人の自由な感性を重んじてこそ、理想的な美にたどり着けると考えたためです。

そしてその理念は、専門的な職人でなくとも、つまり一般家庭の主婦であっても、手芸を通じて日常生活を美的なものにできるという思いへとつながります。「例えば婦人の方なれば、障子に映る梅の影や、月影にゆらゆら揺れる柳の小枝、秋の落葉などを見るとき、すぐにそれを取り入れて自分の着物の模様にすることもできれば、部屋の壁紙に応用もできましょう。それは無理解な職工の染め出したものに比ぶべくもない高い芸術味の溢れたものとなるのであります(1)」と藤井は語ります。

実際、彼は人気雑誌『主婦之友』に1921年から家庭手芸の制作方法を連載し、家庭手芸の普及につとめました。簡単かつ経済的であることに配慮したその手芸品の数々は、多くの主婦にとって非常に参考になったようです。1924年には一般公募による手芸品の展覧会も立ち上がり、この連載がいかに全国の主婦の表現意欲を刺激したかがわかります。

図1

藤井の活動は、工芸の技法を一般家庭へと広げ、作り手として家庭の主婦を想定した点でとても興味深いものです。また、誰もが自分好みのものを個性を生かして制作し暮らしに取り入れられるという発想は、今でいうDIY精神とも捉えられます。今回の特集展示では、藤井達吉の工芸の取り組みを、家庭手芸という視点からご紹介します。

図3

篠、桑、房、悦子の奮闘

藤井達吉を捉える上で欠かせないのは、彼の姉である篠（すず）、妹である桑と房、そして姪の悦子です。彼女達は達吉と共に生活し、さらに彼の唱える工芸、家庭手芸を実践し、普及にも努めました。

実際『主婦之友』では、達吉に加え、篠、桑、房も連載を担当しています。読者にとって、同性である彼女達は達吉以上に親しみやすい存在だったに違いありません。専門的な工芸の世界と、アマチュアである一般読者をつなぐ彼女達は、今でいう読者モデルあるいはインフルエンサーのような役割を果たしたのではないでしょうか。

さらに彼女達は、家庭手芸の名人であるだけでなく、自律的な工芸家としての顔も持っていました。女性が工芸家として作品を発表すること自体が珍しいなか、4人

図4

図5

図6

全員が何度も官展に作品を出展しています。中でも工芸部門が設置されたばかりの第9回帝展には、篠、悦子が共に入選を果たしており注目に値します。

なお、藤井達吉のみならず彼女達の多くも生涯独身のまま制作に打ち込みます(2)。当時、女性が家庭を持ちつつ個人の名前で作家活動をするのは非常に難しかったためと想像されます。家庭と制作の両立の厳しさは女性作家にとって今に続く問題かもしれません。

糸の縫い目から見える世界のもつれ

そもそも工芸と手芸はどう区別されるのでしょうか。藤井達吉は『家庭手藝品の製作法』の中で、刺繍や染織のほか、木彫、漆工、焼物等も紹介しており、手芸も工芸も扱う技法自体に大きな違いはないように見えます。

工芸と手芸の違いは、作り手や制作物の社会的位置付けにあると言えるでしょう(3)。工芸の担い手は男性がメインで、専門的な技能、職能を認められてきました。その制作物は社会に流通し、商品としての経済的価値も備えています。一方、手芸は女性が主に担い、制作物も家庭を中心とした小さなコミュニティで受容されます。手芸においてはその市場価値よりも、制作行為を通じて家族に奉仕する精神性の方が重んじられる傾向がありました。つまり、両者の区別には作り手のジェンダーとそれをめぐる社会構造が強く影響していました。

その点を考慮すると、それまで周縁視されてきた手芸へ目を向け、親族の女性達と共に、家庭の女性に創作活動の素晴らしさを伝えた藤井達吉の活動の意義が、改めて浮きぼりになるでしょう。

一方この時代は、柳宗悦らの「民藝運動」のように都市部の男性文化人にとって「他者」であった人々や「未開」とされた地域における物づくりがあらためて「発見」され評価を集めた時期でもありました。「アマチュア」であり「プリミティヴ」であることが良しとされたのです。藤井の家庭手芸の普及活動もこうした時代のトレンドの中で慎重に検討する必要があるでしょう。例えば、彼は主婦が手芸を通じて家庭を豊かに彩ることを奨めますが、仮に彼女たちが熱心に制作を続け、社会的、経済的にも広く認められたいと願った時、どのような矛盾が起こりえたでしょうか。

手芸は小さなコミュニティで個人的に実践される行為ながら、社会制度や美術史のうねりを批判的に捉える手がかりとなる可能性も十分に秘めています。

愛知県美術館主任学芸員　中村史子

図１：藤井達吉『家庭手藝品の製作法』主婦之友社、1923年　奈良女子大学学術情報センター蔵

図２：藤井達吉と桑が手がけた《紫地流水文金銀泥描長着》（制作年不詳）の一部。着物に直に描かれた流水文は、伝統的な流水文とは全く異なり宇宙っぽさがあります。

図３：藤井篠《鳥毛山草（姥百合と桜草）》（制作年不詳）羽毛を使った装飾は、奈良時代の技法からヒントを得ました。家庭手芸とは異なる特殊な技法が駆使されています。

図４：藤井達吉コレクションの《黒地山草文刺繍丸帯》（制作年不詳）の一部。残念ながら制作者は分かりませんが、植物の茎や根本近くまで刺繍で描き出すユニークな図柄は、植物の写生を重んじた藤井ならではのように見えます。藤井本人か篠たち、あるいは彼らの考えに共感した者が制作したのでしょうか。

図５、図６：藤井達吉『染色図案集』(1933年)で紹介されているデザイン案の一部です。ここに掲載されたデザインの中には、手芸本や作品に使用されているものも見てとれます。

※註：
(1)藤井達吉『家庭手藝品の製作法』主婦之友社、1923年、３頁。
(2)桑は結婚によって一時家を離れますが、その後に達吉たちの暮らす家にて生活を共にします。
(3)山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』（世織書房、2005年、193-208頁）を参照。

会員のひろば

国際芸術祭「あいち 2022」を こうやって 楽しみました

「友の会活動」って何をしているの？「理事会って何をしているの？」という疑問を寄せられることがあります。今回は国際芸術祭「あいち 2022」にまつわるイベントの企画・運営を例に、友の会活動の一端をご紹介します。

Q イベントはどういう流れで決まりますか

A 会員からの要望をもとに理事会で大枠を決め、担当者が詳細をつめていきます。イベント開催のお手伝いをしてくださる方、募集中です。

2022 年

3 月

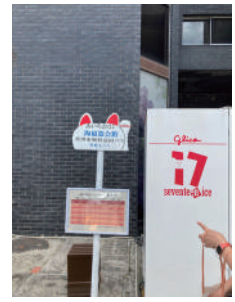
どんなイベントをしよう？

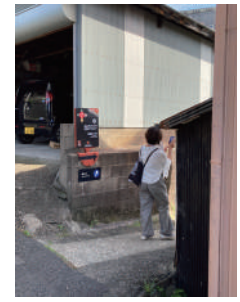
コロナ禍、バスツアーできる？

コンセプトの組み込み方は？

日程は？

「あいち２０２２」での企画を検討





何度も会場の下見に出かけました

4 月

5 月

「さんぽ」で企画しよう！

6 月

会場以外の見どころは？

特別鑑賞会はどうする？

巡り順は？ 人数見込みは？

ガイドをお願いしては？

解説は？ 暑さ対策は？

7 月

担当者から

芸術祭開始の前後、各会場を 3 回ずつ訪れています。少しでも作品に興味をもってもらえるといいな…と思い作成しました。会期が始まってから、下見して下書き。理事会で意見をもらって清書まで約 10 日。今振り返ってみるとよく完成できたなと思います。

Q 「さんぽ」のマップはどなたが描いていますか？

A 理事のひとりにイラストが上手な方がいるので、お願いしています。イベント担当者と連携し、内容を決めていきました。

大好評の「見学のしおり」

7 月 30 日 **国際芸術祭「あいち2022」開催**

開会セレモニー直前のようす。報道陣に混ざって取材しました

オープニングセレモニーのようす　中村学芸員も前列右側に

8月

8月25日

特別鑑賞会を開催

午前の部　10:30 ～ 11:30
　　スライドトーク
午後の部　17:30 ～ 18:00
　　スライドトーク
　　18:00 ～ 19:00
　　会場にて解説

中村史子学芸員による詳しい解説を楽しみました

スライドトークの概要

◆芸術祭の見どころと展示コンセプト
◆美術館の建物を人の「からだ」に見立てた構成　など

会員限定で動画を配信しました

会場でも解説していただき、難解な現代美術作品への理解が深まり、楽しく鑑賞できました。

◀副田一穂学芸員は閉館後に毎日行うローマン・オンダック《イベント・ホライズン》の展示作業を見せてくれました。

9月

9月8日

「一宮さんぽ」を開催

一宮市尾西歴史民俗資料館の久保禎子学芸員から国際芸術祭との関連など詳しく聞きました。午後からは各自で地図をたよりに会場を巡りました。

9月25日

「常滑さんぽ」を開催

午前中はガイドツアーに参加して散歩道周辺の地域の作品を鑑賞しました。

午後は「陶の森資料館」にて職員の石津琳那主事から解説を聞きました。「陶芸研究所」では青木宏主任の解説で堀口捨己の建築を細部にわたって拝見。特別に屋上まで上がらせていただきました。

担当おすすめ

10月

10月10日

国際芸術祭閉会

企画展鑑賞会

豊田市美術館
「ゲルハルト・リヒター展」鑑賞会

2022年10月22日(土)

解説　鈴木俊晴　豊田市美術館学芸員

始めに講堂にて、以前愛知県美術館副館長を務め、現在は豊田市美術館館長の高橋秀治氏からご挨拶があり、その後、鈴木俊晴学芸員の解説を聞きました。

今回の見どころは日本初公開の、アウシュヴィッツをテーマにした《ビルケナウ》。東ドイツ出身のリヒターは、自らの使命としてこのテーマに長い間取り組んできました。なかなか思うようなものができずに苦しんでいましたが、ようやく2014年82才で絵画、写真、鏡、フォトエディションの連なりから壮大な作品を完成させた、とのことです。スキージで分厚く塗り重ねられ剥ぎ取られた作品は、重い存在感を持って私たちに迫ってきます。

印象的だったのは「リヒターは自身のことを『イメージメーカーである』と言っています」という鈴木さんの言葉です。

物の本質を見ること、絵を描くということへの探求は、とても奥深いものだと教えられた展覧会です。

高橋秀治館長の楽しいお話で開会

解説をする鈴木俊晴学芸員

古川美術館
「名古屋に芸術村を！　市野亨と龍起・鷹生～100年の命宿る色彩」展

2022年11月19日(土)

解説　市野鷹生氏　(画家)

今回の企画展鑑賞会ではアーティストトーク形式をとることができました。お話は出品作家の市野鷹生先生です。先生は父が市野亨、兄が龍起という芸術一家のご出身です。

川端龍子に師事していた市野亨は、戦後まもなく千種区に広いアトリエを開きます。アトリエの地は、川端龍子の詠んだ句に由来し「あげはちょう」と呼ばれ、大勢の画家仲間が集まって芸術村の様相だったそうです。「鳥の画家」として知られた市野亨の代表作《七彩鳥》や初公開の《鷹(蟻の行列)》に見られる鳥たちの表情はとても豊かでした。

鷹生先生の作品では、幻想的かつ魅惑的な世界が繰り広げられていました。

奈良・松尾寺の秘仏で、世界一美しいと言われる焼損仏をモデルにした《千手観音菩薩立像》では、暗い宇宙空間に浮かんだ黒いトルソーが、光背のような明るい輝きによってそのシルエットを表し、あたかも千手の光波を放っているかのようでした。

柔らかく穏やかな先生のトークのおかげで、私たちは暖かく心地よい時間を過ごすことができました。

作品の前で解説される市野鷹生先生

※分館爲三郎記念館では、特別展「形の素2022」展も同時開催されていました。

国際芸術祭「あいち2022」特別鑑賞会

2022年8月25日(木)

解説　中村史子　愛知県美術館主任学芸員

芸術祭のテーマになった、河原温の〈I Am Still Alive〉シリーズは、30年間電報を打ち続け、自分の存在証明を作品とした壮大なパフォーマンスです。展示は河原温の静かな作品からスタートして、パフォーマンスやアクションなどの行為、詩文学や音楽をたどって、最後は身体にフォーカスしていくとのことでした。

また「ミルク倉庫＋ココナッツ」の作品では、美術館の8階から10階を貫く吹き抜け空間を肺に見立てて、酸素の循環のように水が館内を循環しているそうです。

「100組のアーティストの中で、きっと自分の心にフィットするアーティストと出会えると思う。出会うことで、日常生活では気づかなかったことや、知ることのなかったことに目を向けるきっかけになるのではないか」とのことでした。

収蔵庫から

深く知るともっと見えてくる

木村定三コレクション
《刺繍種子胎蔵界曼荼羅図》

曼荼羅は、密教の経典に基づいて多数の如来や菩薩・明王などを模式的に配置した図です。その代表が『大日経』による胎蔵（界）曼荼羅と『金剛頂経』による金剛界曼荼羅で、この二者を合わせて両界曼荼羅と呼びます。胎蔵は大日如来を頂点とするピラミッドを上から見たような同心矩形の構成で、外側に行くほど尊像は小さく描かれます。金剛界は縦横3列ずつの9区画（九会）からなり、上段中央の大日如来以外の八会はさらに細かく分割されていますが、これら諸尊は全て大日如来の悟りが姿を変えて現れたものとされます。

各尊をサンスクリットの梵字一文字で象徴する種子に置き換えた曼荼羅があり、単なる略式ではなく、目に見えない世界を認識するためのものとも解されています。木村定三コレクションには、紺の絹に金泥で描かれた南北朝時代（14世紀）の種子両界曼荼羅もありますが、ここに紹介する室町時代（14-15世紀）の曼荼羅は、種子とそれを囲む月輪や蓮台、宝瓶などが刺繍で表されています。刺繍の種子曼荼羅が珍しい上に、この胎蔵曼荼羅の刺繍糸には人の髪が用いられています（馬毛や植物繊維などかとも疑われましたが、分析結果はアジア系の人髪）。鎌倉時代から室町時代にかけての刺繍による仏画（繍仏）には、阿弥陀来迎図など故人の追善を目的に、妻と思われる人の髪を糸に混ぜた作例がかなりあります。『吾妻鏡』にも、正治2（1200）年正月13日の源頼朝一周忌で、御台所（政子）が除髪を以って縫い奉った「阿字」（梵字の最初の音）の軸が掛けられたと記載があり、現在熱海市伊豆山神社蔵の種子法華曼荼羅がそれにあたるかとして、大河ドラマ「鎌倉殿の13人」を機に去年公開されました。

《刺繍種子胎蔵界曼荼羅図》

《神奈川歴博本刺繍金剛界種子曼荼羅》

神奈川県立歴史博物館にも毛髪刺繍の種子金剛界曼荼羅があり、1963年奈良国立博物館での「刺繍仏」展出品時には石川県の個人蔵だったものですが、これと当館の胎蔵曼荼羅が寸法や技法から表具の金具まで近似しており、もと一具だった確率が高いと考えられます。2013年に神奈川で調査させていただいたところ、特に表具の八双両端の金具が両館本とも非対称で、一つずつ入れ替えると形が揃うことがわかり、昔の修理時に付け間違えたかと思われるのです。実は今年3月21日から5月31日までのコレクション展において、神奈川からお借りし初めて両界曼荼羅として展示できることとなりました。どうぞお楽しみに。

深山孝彰

学芸員の横顔

深山 孝彰

-Takaaki Miyama-

愛知県美術館企画業務課長

1988 年に修士課程を修了し（当時の専門は日本彫刻史＝仏像）、 愛知県美術館準備の職に就く。 昨年副館長として定年退職後、 再任用で現職。 友の会の皆様、 もうしばらくお付き合い願います。

美術館から

夏に開催した第26回アートフィルム・フェスティバルの最終日に「開館30周年拾遺集」という小特集が行われ、愛知芸術文化センター建設当時の映像記録を見ることができました。実は美術館にまつわるシーンはあまり出てこないのですが、それでも当時の一大プロジェクトだったことは十分に伝わってくる内容だったと思います。

先日、芸文センターを設計したA＆T建築研究所の取締役・三浦彰さんにお話を聞く機会がありました。芸文センターの設計コンペは、センターのオープンに先立つこと6年前の1986年8月からスタートします。錚々たる建築家がノミネートした全118案の中から、見事最優秀案として選ばれたのが進藤繁氏が中心の大成建設の設計チームで、このチームが独立してできたのがA＆T建築研究所です。三浦さんは当時、設備設計グループのリーダーでした。

2017年からの改修工事など、普段から設備の修繕などで何かとお世話になっている三浦さんは我々美術館スタッフにも顔馴染みの方ですが、改めて設計当時のお話を聞くとやはり知らないことが多く新鮮です。設計当時はまだ図面を手描きしていて、竣工図などの頃にようやくコンピュータを使いだしたなどという話を聞くと隔世の感があります。美術館に関して言えばやはり収蔵庫の設計には苦労したとのことで、当時の保存担当と共に度々文化庁に出向いて細かい仕様について意見をうかがい、24時間空調のための熱源調整などを細かく検討したそうです。

2022年10月30日で芸文センターも美術館も開館30周年を迎えました。最近では仕事をしながら「この建物はいつまでもつのかしら？」と思うことも増えてきました。ちなみに当館の前身、愛知県文化会館美術館は37年8か月でその歴史に幕を下ろしています。名古屋市博物館も来年度から本格的な改修工事が始まるそうですし、ミュージアムのサスティナビリティ（持続可能性）について色々と考えてしまう今日この頃です。

愛知県美術館　主任学芸員　石崎　尚

定例活動

2022年10月～2023年3月

所蔵品管理	モニター	発送	受付[講座イベント]	広報	ホームページ	理事会
0回	1回	2回	5回	8回	随時更新	3回

友の会活動紹介

2022年10月～2023年3月

2022年

10月 ・企画展鑑賞会　豊田市美術館「ゲルハルト・リヒター展」

11月 ・特別鑑賞会「ジブリパークとジブリ展」

・企画展鑑賞会　古川美術館「名古屋に芸術村を！ 市野亨と龍起・鷹生～100年の命宿る色彩」展

12月 ・定例活動のみ

2023年

1月 ・特別鑑賞会「展覧会　岡本太郎」

2月 ・美術館さんぽ（名古屋市東区）

ヤマザキマザック美術館にて

主税町付近には様々な建築も

友の会 これからの活動予定

（変更が生じる場合があります）

4月 ・企画展鑑賞会

日時未定ですが鑑賞会・講座なども計画中です

これからの展覧会のご案内

近代日本の視覚開化　明治

呼応し合う西洋と日本のイメージ

4|14㈰～5|31㈬

今年はなんと、友の会発足30年！　いい大人になりました。美術館に導いていただき、会員のみなさまに支えられながらよちよちと歩いた30年。「三十にして立つ」ことができるよう、新たな一歩を踏み出したいものです。

□編集　松下智子
喜田泉／小林克敏／田中寛／冨永晃一
□協力　愛知県美術館
□発行　2023年3月

友の会入会のご案内

詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は事務局（下記）までお問い合わせください。入会のご案内パンフレットやホームページでも詳しく紹介しております。ぜひご覧ください。

受付場所　★愛知県美術館10階受付
★友の会事務局　★振込も可

愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2
愛知県美術館内（愛知芸術文化センター10階）
info@apmoa-tomo.com
ホームページへのアクセスはこちらから
愛知県美術館友の会　検索
apmoa-tomo.com
tel. 052-971-5511（代）
fax. 052-971-5617
（火・木　11:00~15:00）
twitter　@apmoafriends

Art Direction:Masaru Nakada　Design & Layout: Katsutoshi Kobayashi